

文化

我内なる世界・宮古島の深層

上井幸子写真集『太古の系譜』にふれて

安里英子 △▽下

ウヤカシは何だろうか。女性たちがそよよと迎える神々とはどのような神々なのだろうか。何日も続く神謡(ウヤ)は何が語られているのだろうか。掲載した写真にあるよ

うは皇冠(カシ)を深々とかぶり、麻の神衣裳(ウヤニ)



残された遺産を見直す

介してこの世にもあがえる。このようにして「命のウヤ」が繰り返されてきた。御簾とは「あの世」と「この世」を



上井幸子さん

上井幸子写真集『太古の系譜』から。猿俣のウヤ(1973年)

に「ウヤルマドキ」などのつるを腰に巻く巫姑の女たち。

神を迎えるとき、ウヤに祖霊たちが導いてくることを意味する。娘たち(神女)は遠くへ来た祖霊を御簾に迎え、祖霊と娘たちはそよよと出会い、祖霊たちは娘の肉体を

つなぐ場所である。

祭祀を営んだ証

写真集には、繩島の比羅島光によって、豊尻、猿俣、伊良部島の祭祀の行事一瞥が付加されている。これによってウヤカシなどの巨母の流れを

知ることが出来る。

また、祭祀構造を知るには、比羅島雄の「猿俣のウヤと神女組織」(『神々の土層』③ 遊行者祖霊神ウヤカシ宮古島 三一社、1991年)が詳しい。それには神名を役割が記されている。例えばウヤカシ・ウヤカシは豊建

の神、ウヤカシは五穀の神、ミクヌヌは水の神という具合に多くの神々がいる。猿俣の神組織の特徴は、ウヤの序列に対して、自然神が並列して存在しているということである。神女組織が次第に秩序化(権威化)していった一方で、ここでは自然神の存在が大きな意味を持っている。国家を持つことがなかったウヤ民族のウヤカシは擬人化された自然神が物語の中心を成している。琉球に古くから置かれてきた祭祀には、このような人類意識の生命とは何かという問いが込められる。と同時に、共同体が国家という権威に取り込まれる過程、あるいは逆に権威にあらわい、独自の祭祀を営んできた証を見ることが出来る。たに比羅島がよほど琉球

の島で行われる祭祀は世界的にもまれな女性中心だといえる。琉球では姉妹(ウヤカシ)には特別な霊力があると信じられてきた。仏教や儒教の影響力が及んだ日本本土は早くから男性中心の社会に移行した。それが厳しい秘儀に「母性主義」を批判しつつも平等なところの「正始女性」は本陽であった。この「正始女性」は宮古島の神歌において母太陽と祖神をたたえている言葉もかきかかっている」と、原初の女性の姿に言及している。

記録する意味

祭祀は村落共同体の精神的なよりどころであり、秘儀であった。しかし、今日、人びとは移動し、世界に拡散している。祭りの精神は、形を失って現代社会に反映されてい

る。また、秘儀は権力から祭りを守るための巨防衛だったのではないかと私は考える。つまり、1600年代以後、一部の祭祀に禁止令が直皇正府から出される。人びとは役人の目を避けて祭りを行った。それが厳しい秘儀につながったのではないかと

今日、世界では争いが絶えない。戦争でなくとも都市での共同意識や家庭崩壊は人びとの善を危うくしている。殺人や介護の放棄は巨防衛に起こっている。「共に生きる」とは何か、「人はどのように生きてきたのか」。私たちが学ぶのは「我内なる深層の世界」に他ならない。ウヤカシや島々の生きた祭祀が絶えていく。私たちは、あらためて、記録として残された遺産を見直したい。祭祀の精神

を奪ひ取り、共有する」ことにより、現代的に置かれた新しい時代の創造に参与することを目指すのではないかと。とりわけ「生きる」という困難な時代には。

(フリーライター、沖縄大学非常勤講師)